



伊那の空の下で……

蝶ちように氣きのほぐれて杖つゑの軽かさかな

井月さんのスタイルといえば、くたびれた着物の上に羽織はおり、袴はかまをつけることが多かったといわれます。腰こしにはヒョウタン、そして矢立やたてをさし、古ぼけた小さな竹の行李こうりと風呂敷包ふろしきづつみを両掛りょうがけにしています。行李ばしょには芭蕉ばしやうの像ざうと句集くしゅう（俳諧集）が入っていました。瘦やせて背が高く、髪かみやヒゲ、眉毛まゆげも薄うすく、切れ長なトロリとした斜視眼しゃしがんの持ち主で、牛うしよりも遅おそい歩調あしづらでトボトボ歩いていたと語り伝えられています。

伊那は人情のあつい地域で、寄れば「お茶を飲んでけ。」「何もねえが飯でも食ってけ。」、と家へ招き入れてくれました。酒好きの井月さんに自家製のどぶろくをふるまってくれる家もありました。

翌日あすしらぬ身の楽たのしみや花はなに酒さけ

蝶ちように氣きのほぐれて杖つゑの軽かさかな

浮かれ気分の井月さんは、一宿一飯いっしゅくいっぺんのお礼おれいに、

五・七・五の俳句を、それは見事な筆字で書いて置いていくのです。

発見された晩年の日記には、宿泊した家が二〇〇軒、昼飯に寄った家は二〇〇軒にのぼっていました。



井月さんは伊那の家々を巡り、句会を開いて俳句を教え、少しばかりの謝礼を得ていたようでした。一日、二日、気に入れば三日、四日と泊まるような生活を繰り返していたのです。

現在一八〇〇ほどの句が訪ねた家の蔵などから発見されています。まだまだ見つかるのではないのでしょうか。



井月さんの謎なぞ

妻持ちつまもち—あことも有り—あを着衣始あはらひはじめ

★着衣始—新年にはじめて着物を着ること



井月さんの人生はわからないことばかりです。

どこで生まれたのか、どういう家で育ったのかわかりません。聞かれても、まったくと聞いていいほど自分の素性すじょうを語りませんでした。今でもわからない



いことだらけなのです。

伊那に残された足跡や詠われた俳句を手がかりに、少し探っていきましよう。

全国を旅して集めた俳人たちの句を出版しようと、井月さんが高遠藩の重臣岡村菊叟を初めて訪ねた時の話があります。

「おぬしはいづこより？」

（あなたはどこから来られましたか）と聞かれ、

「こしの長岡の産なり」

（新潟県長岡の生まれです）と答えました。

「こし」とは越、今の北陸地方です。

井月さんが、越後国長岡藩士で本名は井上勝蔵であるとはっきりわかったのは、井月さんが亡くなってからのことです。どんな家に育ったのでしょうか？

長岡市の歴史家の調査によると、長岡藩の井上姓は全て下層の武士で、井月さんは噂されていたような高い身分の生まれではないようです。

井月さんの詠む俳句や達筆な字からもわかる高

い教養は、身分が低くても通える藩校「崇徳館」で学んだのではないかと言われています。

井月さんの越後での人生をうかがわせてくれるような句もあります。

雪車に乗りしこともありしを笹粽





妻持ちしことも有りしを着衣始



遣るあてもなき雛買ひぬ二日月

最初の句は、井月さんが越後名産の笹ちまきを
 食べながら、雪国の越後でソリに乗った幼い頃を、
 なつかしく思い出している句です。

その後の句から、妻を持っていたこと、娘がいた
 のではないだろうかと思わせてくれます。三月三
 日の女の子の節句といわれる雛祭りの前日、細い
 糸のような二日月の空の下で詠んだのでしょうか。